

「自分らしく生きる」とはどういうことなのか

竹内聖一

はじめに

「自分らしき」というものについて、我々はどうのようなイメージを持っているだろうか。多くの人は（たとえ「自分らしきとは何か」という問いに明確には答えられないとしても）それが容易に変化するものではないという直感をもっているのではないか。もちろん、我々の外見や健康状態などは年月を経て変化する。また記憶や知識についても同様である。しかし、そうした変化はどちらかと言えば些細なものであり、本質的な事柄ではない。結局のところ、自分は自分であることをやめることはできない、という開き直りとも諦めともつかない思いが一方にある。

他方で、自分が自分であることを積極的に守り抜こうとする姿勢も我々にはある。「自分らしく生きよう」というスローガンなどはその姿勢を表現したものであると言える。人が何かを能動的に選択する場面におい

て、こうしたスローガンが重要な目標とされるのである。我々は、その選択が重大なものであればあるほど、自分らしい決断を下すことを目指し、下せなければ失望する。また周囲の人々も、本人が自分らしい決断を下せるよう最大限の努力をする。自分らしい決断が、多くの場合、本人にとって最善の決断であるという事情を踏まえるならば、意思決定に際して、自分らしい決断を目指すことは非常に大事なことであると言えるだろう。しかし、私の見るところ、人々が自らの自分らしきを守る上で、自分らしい決断を目指すだけでは十分ではない。

というのも、自分らしい決断が、常に納得のいく結果をもたらすとは限らないからだ。その場合、私の自分らしきは、危機にさらされることになるだろう。納得のいく結果が得られなかったということとはつまり、私は何らかの意味で自分らしいとは言えない状況におかれているということである。そうした状況におかれることで、私は自分の人生の一貫性が損なわれたと感ずるだろう。たとえば、自分の能力を生かせると信じてついた仕事で、自分の考えたようなものではなかったという場合、その人は自分の決断により、幾分か自分らしさが損なわれたと考えるだろう。また、がんの告知を受けた人が、これまでの仕事を続けることが自分らしいと考えて、抗がん剤による治療を選択したものの、その治療の成果が思わしくなく、職場復帰が次第に遠ざかってゆく場合、その人の自分らしきは大きな危機に瀕していると言えるだろう。このように、人を取り巻く状況の変化が、自分らしきの存続を脅かすことがある。その場合人は、いったんは損なわれた自分らしきを何らかの仕方でも回復するのだから、その後自分らしく生きていくことはできないのである。

また、こうした状況の変化のさなかで選択を行う場合には、本人が自分らしいと思えるような選択肢が何一つない、というような場合もありうる。この場合、本人がどのように決断しようとも、それは（少なくとも決断の時点では）自分らしくない決断である、ということになるだろう。それゆえ、自分らしい決断を目指すだ

けでは、人々がその自分らしきを守るには十分とは言えない。そもそも自分らしい選択肢が存在しない可能性や、たとえ自分らしい決断であつても、その結果が自分らしきを損なう、という可能性にも目を向けなければならぬのである。

もちろん、そのような場合にも人は時を経て自分らしきを再び取り戻すことはある。その人は、自分の選択がもたらした不本意な結果を、ただ拒否するのではなく、自分の人生の一部として受け入れるかもしれない。また、不本意ながら下した決断を後から振りかえり、「やはりあれは自分らしい決断だったのだ」と思い直すこともあるだろう。この場合、その人は自分らしきの一部をなすものとみなしているのである。ただし、その場合、その自分らしきは、これまでのものとはいくらか、あるいは大きく異なっているかもしれない。

本稿で私が考えてみたいのは、このように、いったんは損なわれた自分らしきが再び回復される過程で、当人には何が起きているのか、ということである。この問いに対する私の解答は次のようなものだ。我々は自分の選択が不本意な結果に終わった場合に、あるいは不本意な決断を下さざるを得なかつた場合に、それを後から語り直す（新たな記述を与える）ことで、自分らしきを回復するという作業を行っているのではないだろうか。それは、不本意な結果なり選択なりに、別の意味を与える新たな物語を作り出すことで、なんとかして自分らしきを存続させようとする試みである。そしてこうして生まれた新たな物語に呼応するように、自分らしきもまた次第に変化していくのではないだろうか。

一 連続ケースと非連続ケース

前節で述べたように、本稿の主題となるのは、自分らしきの存続が危機に瀕するケースである。以下では議

論のために、自分らしさの存続が比較的容易なケースを連続ケースと呼び、そうでないケースを非連続ケースと呼ぶことにしよう。

まず連続ケースとは、選択肢の中に主体にとって一定の望ましきをもつものがあり、その選択の結果も主体にとつて一定の望ましきを持つているというケースである。こうしたケースにおいては、たんにそれまでの自分らしさが延長されるということはみやすいだろう。これに対し、非連続ケースとは、選択肢の中に主体にとつて一定の望ましきをもつものがない、すなわちどれを選んででも不本意な選択とならざるを得ないというケースや、本意からの選択が、当人にとつてきわめて不本意な結果をもたらすというケースである。こうしたケースでは、すくなくともそのままでは、それまでの自分らしさがたんに延長されるということはないだろう。そこで、人はまずそれまでの自分らしさを延長するのに役立つような別の決断の可能性を探るだろう。しかし、そうした決断が常に可能であるとは限らない。すでに八方手を尽くして、問題の決断が最後の希望であつたとしたら、それまでの自分らしさを維持しようとする試みを断念せざるを得ない。そのような場合、困難な状況に適切すべく、自分らしさそのものが見直されなければならないように思われる。そして、見直しの結果、自分らしさは何らかの仕方の変容を被り、連続性は損なわれることだろう。この場合、見直しの前後で、人が自分らしさと呼べるようなものを手にしているとしても、それら二つの自分らしさは決して同じものであるとは言えないのである。

このように状況を整理してみたとき、意思決定の合理性や妥当性を論じる場面において問題にされてきたのは、常に連続ケースの方であつたように思われる。つまり、注目されてきたのは常に、行為の直前に位置している決断のあり方であり、行為がもたらした結果に人がどう対応していくのかということではなかった。もちろん、意思決定そのものを主題として論じる以上、意思決定の結果にどう対応するべきかが論じられないのは

当然のことである。しかしそれにより「自分らしきを守る」とは、単にそれまでの自分らしきとの延長を指すことに他ならない」という見方が助長される結果となつたのもまた事実であるように思われる。以下では、それをよく示す議論の流れを取りあげておくことにしよう。

たとえば、H・フランクファートの議論は、人が意志の自由を發揮していると言えるのはどのような場合かという問題をめぐって展開されたものであつた (Frankfurt, 1971)。これは、人間らしい行為を、意志の自由を發揮する行為ととらえた上で、そうでない行為との境界線を引こうとする試みであると言える。目下の我々の関心にひきつけるならば、フランクファートの問題は「自分にふさわしい(自分らしい)選択のあり方とはどのようなものか」と言い換えることができるだろう。この問題に対する彼の答えは、「人が心から自分がやりたいと考えることをやっているとき、人は意志の自由を發揮していると言える」というものであつた。そして、フランクファートは、「人が心から自分がやりたいと考えることをやっている」と言えるのは、人が単に一階の欲求に従つて行為しているときではなく、「その欲求に従つて行為したい」という二階の欲求に従つて行為しているときであると答えたのである。たとえば、甘いものの誘惑に負けて甘いものをつい食べてしまう人物が、「甘いものを食べたいという欲求には従いたくない」という二階の欲求ももつているとすれば、この人物は自分が心からやりたいと考えることをやっているとは言えず、また、その行為は意志の自由を發揮するものとは言えないことになる、というわけである。ここには、選択の適切さをはかる基準を、自分の持つ既存の欲求との連続性のもとにとらえようとする姿勢の萌芽を見て取ることができるだろう。二階の欲求とはまさに自分もつ特定の欲求と自分の現在の行為との間に連続性を持たせたいという欲求であると解釈できるのである。しかし、こうした議論にはただちに反論が寄せられた (Watson, 1975)。それはなぜ二階の欲求の方が、自分の本当にやりたいことを示していると言えるのか?という疑問である。両者とも同じ欲求である以上、どち

らか一方が他方に対して優先権を持つとは考えがたい。また、仮に階層が高い方が常に優先権を持つのだ、とするのであれば、二階の欲求に対しても三階の欲求の存在を考慮することができ、そちらのほうが優先権を持つと考えてもよいのではないか、しかしその場合にも四階の欲求を考慮することができ……という具合に議論は続く。要するに、二階の欲求を持ち出すだけでは、本当に自分のやりたいことの特徴づけとして決め手に欠けるというわけである。言い換えれば、階層の高き自体は、個人の内部で対立するどちらの欲求との連続性を優先させるべきなのか、決定し得ないということである。

こうした論争を踏まえたブラットマンは、自分らしさのありかを指し示す心的状態を、フランクファートよりも手の込んだ仕方の特徴づけることで、問題を回避しようとする (Barman, 2000)。ブラットマンによれば、自分が本当にやりたいことを特徴づけるのは、人がもつ長期的な計画の一部をなし、それゆえに長期にわたって人の振る舞いを支配するような方針（彼自身はそれを自己統制的方针と呼んでいる）なのである。ブラットマンの考えに従うなら、ある人が本当にやりたいのは甘いものを食べないことであると言えるためには、甘いものを食べたいという欲求に従いたくないという二階の欲求をもつだけでは十分ではない。その人物は、甘いものを食べないという方針を含むような計画（一ヶ月で五キロやせるといふ計画）をもち、実際にそれに従っているのだからなければならないのである。ここに至って、行為者の判断を代表する資格をもつのは二階の欲求のような単一の心的状態ではなく、本人がもつ長期的な計画（それは欲求や信念、意図といった多数の心的状態からなる複合体とされる）であると主張されることになる。すなわち、自分らしさは、行為者のもつ長期的な計画と密接な関わりをもつものと見なされ、自分らしい選択とは、こうした長期的な計画と連続性をもった選択である。ブラットマンの主張はそうのように解釈できるだろう。

意思決定理論がとっている、通常の状態における意思決定という問題設定のもとでは、ブラットマンの議論

は妥当なものと言えるだろう。しかし、主体を取り巻く状況の急激な変化という要素を考慮した場合はどうか。そうした条件のもとでは「本人のもつ長期的な計画と連続的な選択こそが合理的かつ妥当であり、本人にとつて最善の選択肢である」というブラットマンの主張はもはや有効なものではなくなるのではないか。というのも、そうした状況とはまさに、本人のもつ長期的な計画が挫折を余儀なくされる場面であるに違いないから。こうした場面において人はしばしば、まずは不本意な選択をし、後になってそれを正当化したり合理化したりするという道を通る。この場合、当の選択を支持するような自分らしさは、少なくとも選択の時点では本人の中に存在していなかったか、あるいは存在していたとしても自分らしさを示すものとはみなされていないであろう。しかし後になって、当の選択を支持するような自分らしさを何らかの仕方でも本人が獲得することによって、「あの選択は間違いではなかった」という思いが生じると考えられる。最初の決断の時点にのみ注目する彼の議論によつては、こうしたプロセスをとらえることができないのは明らかだろう。

意思決定の場面にのみ注目することがもたらす問題はまだある。それは、意思決定の時点で、結果の望ましくなさをいかに正確に算出するかという問題がクローズアップされるあまり、選択の結果実際に望ましくないことが起きた場合に、どう対応すればよいのか（あるいは人々は実際にどう対応しているのか）という問題が見えなくなる、ということである。このような場合にも、それまでの自分らしさはいったん失われざるを得ない。こうした状況におかれた人々がそうした不本意な結果を受け入れるためには何らかの仕方でも、それを自分らしさの一部として位置づけ直さなければならぬのである。

それゆえ、今述べたような二つの場面における自分らしさとは、ブラットマンの考えるものとは異なり、むしろそれまで本人がもっていた長期的な計画を放棄することではじめて得られるようなものではないかと考えられる。したがって、フランクファートの見方も（そして、それを洗練させたブラットマンの見方も）人がそ

の自分らしきを守る営みをとらえる上ではやはり不十分なものであると言わざるを得ない。それは自分らしきがいったん喪失され、ふたたび回復されるというプロセスをとらえることができないのである。こうしたプロセスをとらえるには、非連続ケースを検討しなくてはならない。

二 行為の理由が失われるとき

まずはごく単純な非連続ケースから検討してみることしよう。ヴェルマンは次のような興味深い事例を挙げている (Velleman, 2000:15)。ある人物が通りを歩いている。ところがその人物はふとした拍子に突然自分が何をしているのか忘れてしまったことに気づく。辺りを見回せば、自分がどの通りを歩いているのかは知ることが出来るし、周りの景色自体も見慣れたものである。しかし、今やこの人物は、自分がなぜその通りを歩いているのかを知らない。そしてそれゆえに自分が何をしているのかも知らない。そして、この人物は自分が今どこへ向かおうとしているのかを思い出すまでは、その場を動こうとしないだろうとヴェルマンは指摘するのである。

一見したところ、この人物のおかれている状況と、これまで我々が非連続ケースと呼んできた状況とは共通するところがないように思われる。しかし、私の考えでは、それはやはり見かけのことに過ぎない。

まずこの人物のおかれた状況について考えてみよう。この人物はなぜ再び歩き出すことができないのだろうか。それはもちろん、自分がどこへ向かおうとしているのか忘れてしまったからである。そしてそれを思い出さない限り、この人物には通りを歩き続ける理由がない（もちろん、目的地を特に決めずに再び歩き出すことはできるだろうが、それはこの人物がそれまでにしていたのとはまた異なる行為だろう）。

そしてヴェルマンは、人は誰でも「自分に理解できる行為をしたい」という欲求をもっていると指摘する。人はこうした欲求をもっているがゆえに、自分のしていることに理由が見いだせなくなる、すなわち自分で分のしていることを理解できなくなると立ちすくんでしまうのだ、というわけである（大げさに言うならばこのとき我々が感じるのは、「自分がなぜそんなことをしているのか分からない」という不安である）²。

他方、非連続ケースの方はどうだろうか。たとえば、自分らしいと考えて下した決断が、不本意な結果に終わった場合、人はやはりその決断に従って行為する理由を失うのではないだろうか。たとえば、末期がんの状態にある患者が、少しでも病状を回復させることを自分らしいと考え、抗がん剤による治療の継続を決断したものの、その治療が功を奏さなかった場合、この人物はそれを継続する理由を失うのではないか。

つまり、私の考えではヴェルマンの挙げるケースと非連続ケースの共通点は、行為者が自分のしていることを続ける理由を失う、という点にある。そして、後者のケースにおける理由の喪失は、ヴェルマンのケースにおける喪失に比べて、より深刻なものであるということも付け加えておくべきだろう。ヴェルマンのケースに出てくる人物は、自分がどこに向かっているのかを思い出しさえすれば、再び歩き続ける理由を手にすることができる。あるいは不幸にして思い出せないとしても、これからの時間を全く別のことをするのに当てることもできる。他方、非連続ケースに出てくる人物には、特に思い出すべきことなどない。この人物が再び行為する理由を手にするためには、何か別のことが必要なのである。この「別のこと」が何であるかを明らかにする手がかりとして、まずは我々が行為の理由を失ったときに何を失ったのかをさらに考えてみることにしよう。

三 行為の理由が失われるとき、失われるもの

現在の行為を続ける理由を失ったとき、我々が失うのはいったい何なのだろうか。再びヴェルマンの挙げたケースについて考えてみよう。この気の毒な歩行者は、誰かに「なぜあなたはこの通りを歩いているのか」と問われても、答えることができない。どこへ向かおうとしているのか、もし覚えていたとしたら彼は造作もなく答えることができただろう（「今自分は」という場所へ向かおうとしており、そこへ行くのは」ということをしてもらったためである。それをしてもらうのは、」のためであり……」。もちろん、こうした説明はいつか終わりを迎えるだろうが、大切なのは、その人は自分が現在していることを、自分が現在もっている計画のうちに適切に位置づけることができる、ということだ。つまり、「行為の理由」とは、彼が現在している行為と、彼が現在もっている計画とを結びつける役割を果たすものなのである。そして、この歩行者の場合、通りを歩くことが位置付けられるべき、より大きな計画を忘れてしまったために、歩くことの理由が失われているのだ。このことは行為者がその計画を遂行する妨げとなるだろう。

しかし、それだけではない。自分がいましていることの理由を知らないことで、行為者の状況理解は混乱したものとなり、時にそれは大きな不安ともなりかねない。なぜなら、行為者がかつ計画は、行為者が出会う、対象や出来事、そして人物に固有の意味づけを与えるものだからだ。たとえば、店に急いで買い物に行く際、我々は通りの建物をその店にたどり着くための目印として見ている。また、道の真ん中で何か騒ぎが起きて人垣が出来ているときにも、のんびりしているときなら足を止めて人垣の中を覗き込みもするだろうが（この場合、この騒ぎは、暇つぶしの種という意味を帯びている）、今は足早にその横を通り過ぎる（この場合には、気を散らす出来事という意味しかもたない）。同じ出来事でも、どのような計画のもとに行動しているか

によつて、意味合いが変わつてくるのである。³

しかし、この人物が自らの計画を忘れたとたん、それらの対象や出来事は、つい先ほどまで帯びていた意味をすべて失つてしまう。今やこの人物が目にはしているのは、先ほどとは全く表情を変えた、なじみのない風景である。たとえそれが毎日歩いているよく知った町並みだとしても事情は同じである。なぜ自分がそこを歩いているのかを忘れたとたん、なじみの町並みの中でさえも、見知らぬ町をはじめ歩いて道に迷つたとき感じるような心細さを我々は感じてしまうのである。

このような心細さは、先ほど挙げた抗がん剤治療が奏効しなかつた人物の場合にも当てはまるだろう。そして、このとき感じられる心細さはさらに大きなものとなるだろう。というのも、この場合、抗がん剤治療に理由を与えていた計画そのものが挫折し、行為者かものはやその計画の遂行にコミットしなくなつているために行為の理由が失われているからだ。これを踏まえて二つの点を指摘しておきたい。まず第一に、計画を忘れたわけではない以上、当の計画は依然としてこの人物の出会い、あらゆる対象や出来事、そして人物に、これまで通りの意味を与え続けるだろう。そして第二に、こうした重大な問題に関わる計画は行為者の考える自分らしさと密接に結びついている。つまり、こうした計画が様々な対象に与える意味というのは、行為者のもつ自分らしさと密接なつながりをもっているのである。したがつて、こうした意味を放棄することは、行為者にとつて非常に難しいのではないかと考えられるのである。そしてそれゆえに、そうした計画は、この人の人生の物語と呼ぶべきものであると言える。

これら二つの点が意味するのは以下のようなことである。たとえば、美術館に行こうと町を歩いている人が、途中で気分を変えて買い物に行くことにするのは、とても簡単なことだ。町並みもそれにあわせて、その意味を変えるだろう。しかし、同じようにして、人生の重大な局面において一度下した決断を気軽に変えるという

わけにはいかない。それは自分らしき大きく関わる決断、すなわち自分の人生の物語を方向付ける決断だったはずだからだ。そうした決断によって生じた計画は容易に放棄できるものではない。また自分では放棄したつもりでいても、実際には放棄していないということとはしばしば我々が経験する通りである。それゆえ、こうした計画のもとで対象が帯びている意味というものが容易に消え去るということはない。(たとえばそれは、「何を見てもあのことを思い出してしまおう」と表現されるような状況である)

しかし、くだんの計画のもとでこの人物にとつて様々な対象がもつ意味は、もはや行為者が行為する手がかりとなるものではない。行為者はもはやその計画にコミットしてはいないからである。言ってみれば、それはすでに「死んだ」意味なのである。

このように、挫折した計画は、忘れられた計画とは異なり、人の認識を依然として制約するという事実が、事態を困難にする。というの⁴も、まさにこうした事実が、その人が新しい計画をもつ妨げとなるからである。たとえば、がんと最後まで闘うことを自分らしいと考え、抗がん剤による治療を決断した人物にとつては、(たとえば、治療の成果があらがらず抗がん剤治療の続行に理由を見いだせなくなった後でも)治療を断念するという選択や、それを勧める医師や家族の言葉は、依然として否定的な意味合いを帯びたものと映ることだろう。そうした否定的な意味が、死んだ状態であつても残っているということとは、その人物が、治療の中止という方向性を真剣に検討することを妨げ、結果的にその人物の選択の幅を妨げることになる。それはその人の人生の物語がその時点において停滞することを意味している。同様のことは、医療の現場を離れても、もちろん起きているだろう。

四 変化はどのようにして生じるのか？

こうした問題に、ナラティブという観点から取り組むナラティブアプローチでは、まず自分（または相手）がどのようなナラティブ（物語）に従って生きているかを自覚することが重要であるとされる。たとえば、ここに対立している夫婦がいる。彼らは様々なことで対立しており、今はそれぞれのいここにどのような土産を買うのかという問題で対立している。夫はそれぞれのいここに同じキャラクターの野球帽を買って帰るべきだと主張するが、妻の方は断固としてそれを拒否する。二人を相手にナラティブ・セラピストがセラピーを試みると、次のようなことが判明する。夫の方は、自分のいここに自分の惨めだった子供時代を重ねているために、そのいここが悲しむようなまねはなるべく避けたいと考えていた。他方、妻の方は、夫の家族にたいして自分の家族と同様に接することで、自分の家族をおろそかにしているという感覚をもっていた、というのである。こうした深層心理の分析がどの程度妥当なものなのかということは、いまはおこう。ここで我々が関心をもつべきはその点にはない。重要なのは、こうした分析結果を知ることが、大人たちが自分や相手の行為に対して行ってきた意味づけにどのような影響を与えるのかということの方である。これまでこの夫婦は、相手の行動を単に相手のわがままや不寛容の表れとして意味づけてきた。しかし、こうした分析結果を知ることによって、二人には相手の行動を別の仕方の意味づけるといふ選択肢が新たにうまれたのである。ここには、挫折した物語が、我々の人生に張りめぐらせている固着した意味の網の目をどう解きほぐすかという問題に対する解答の可能性があるように思われる。それは、現在その人がとらわれている物語に対し、別の物語の可能性を提示するという方向性である。

最後までがんと闘うことを、自分らしいと考えて抗がん剤による治療を選択した人のことを再び考えてみよ

う。この人はひよつとしたら最初はがんを治して社会復帰できると考えていたかもしれない。しかし、周囲の反応からそれが不可能であることを悟り、自分がこれからすることを「がんを治す」ことではなく、「がんと最後まで闘う」こととして語り直す。ここにはすでに、自分の行為を語り直し、その背後にある物語をも変化させることによつて、自分を取り巻く対象や出来事に対する意味づけを変化させようとする試みが見られる。

先に言及したナラティブセラピーでは、まず、自分たちの従う物語を自覚することから、互いの行為に対する意味づけが変化するという現象が生じていた。しかしこの順序は逆でもあり得る。すなわち、まず自分の行為を別の仕方ですべて記述し、その意味づけを変化させることにより、それを足がかりとして自分の従う新たな物語をつくり出すという順序である。そして、セラピーのような特別な状況でもない限り、我々がたどるのは多くの場合、この後者の順序なのではないか。そして、そうした新しい記述による意味づけは、上でみたがん患者のように独力で発見される場合もあるが、そうではなく、他者の何気ない一言によつてもたらされることもあるだろう。そうした何気ない一言がもたらした新たな意味づけから、新たな物語の可能性が見いだされることもあるのではないだろうか。決断するのも行動するのも結局は本人であることは間違いない。だが、それほどのように語るのか、ということとは常に他者に対して開かれている。そして、このように開かれてあることが、我々に、挫折した物語から抜け出す一つの道筋を与えてくれるのである。

もちろん、こうした可能性の発見により、自動的に問題が解決されるというわけではないだろう。新たな物語の可能性は、それまで見えていなかった選択肢を新たに用意することで、既存の意味の網の目から逃れるきっかけを与えるに過ぎない。それが成功するかどうかはあくまでも当人次第なのである。何よりもまず、その新たな物語が、当人にとつて「しつくりくる」ものでなければならぬ。それは古い物語を凌駕するだけの魅力を備えていなければならないのである。

以上の議論は、「自分らしき」存続の危機に瀕している人に対して我々周囲の人間がどのような支援をすべきか、その方向性をも示しているように思われる。既に述べたように、本人がすでに行っている意味づけをただ否定しても（「もう無理だ」「いつまでこだわっているのか」「あきらめたらどうだ」、それを放棄させることは難しい。しかし、それとは別の、新たな意味づけの可能性を提示することならば可能だろう。自分らしい意思決定を支援するに際しては、適切な決定の材料としてさまざまな情報を提供すべきであるとされる。他方、自分の人生の物語の存続が危機に瀕している人にとって必要な助けとは、その人が現在の状況に対して行っているとは別の意味づけの可能性を示し、現在の意味づけから自由になることを手助けすることなのである。

五 物語を引き受けること

前節において私は、新しい物語を選びとるかどうかは本人次第であると論じた。これに対し、それはまさに、新たな物語が選択されるかどうかは、その物語がそれまでの自分らしさを延長するものと見なせるかどうかによつて決まると主張することであり、私が批判したプラットマンの議論と基本的には変わるところがないのではないか、という疑問が寄せられるだろう。そこで、最後にこの疑問に答えておくことにしたい。

たしかに一見したところ、変化したのは行為の記述だけで、それを選択する行為者の側には特段の変化はないように思われる。たとえば、がん患者が、自分がこれからすることの新たな意味づけを独力で発見するケースでは、新たな意味づけを発見することは、既存の選択肢がもつ別な側面に気づくことに過ぎないように思われる。つまり、行為者がすでにもっていた価値観にはいかなる変化も生じておらず、ただ（これまで気づかなかった）既存の選択肢の新たな側面に気づいたというだけのことである、と言えるだろう。これは確かにその

通りである。しかし、そのことは行為者の側に何の変化も生じていないということを意味しない。というのも、選択肢の意味づけが変化することにより、それらの選択肢の望ましきの順序も変化しうると考えられるからだ。たとえば、抗がん剤の投与が奏効せず、その選択肢に対する「がんを治す」という記述が放棄されるとき、抗がん剤の投与という選択肢の望ましきは、いったん下位に沈むことになるだろう。しかし、この選択肢に「がんと最後まで闘う」という新たな記述が与えられ、新たな意味づけを獲得したならば、この選択肢の望ましきは再び変化することとなるのである。

通常的意思決定理論においては、選択肢の望ましきの序列はすでに確定しており、行為者はそれを踏まえて選択を行うのみであるという想定がなされている。これに対し本稿で論じたのは、選択肢の望ましきそれぞれ自体が変動するという可能性である。人は何が望ましいのかを選択する前に、まずは選択肢それぞれに記述を与え、その望ましさを確定させておかなければならない。そして、一見したところ選択肢の望ましきは主体にとつて動かしがたいもののようにも思われる。だが、選択肢に対する記述を変化させることでこの序列を変化させることは可能なのである。そして、ぜひとも強調しておきたいのは、こうした変動を経て、以前は望ましくないと判断した選択肢を望ましいと判断するようになることは決して不合理ではないということだ。というのも、それは（意志の弱さの場合のように）すでに確定された選択肢の序列の中で、最善ではないと自分が判断したものを選択することではなく、ある望ましきの序列を放棄し、別の望ましきの序列を採用することに他ならぬいからである。そして、こうした変化は、選択肢が既に行われてしまった後でも起こりうる。不本意な決定を、後になって受け入れるとき、我々が行っているのは、その選択を最善のものと位置づけるような望ましきの序列を新たに採用することなのである。

おわりに

本稿では、自分らしさが危機に瀕するケース（非連続ケース）を取り上げ、そのようなケースにおいて自分らしさが回復されるプロセスについて考察した。そうした事例において問題となるのは、行為者の出会う対象や出来事に対して、既存の物語がもたらす意味づけがときに強固なものとなり、新たな物語の獲得を妨げることでであると私は論じた。そしてこうして固着した物語から自由になるための手段として、それとは別の意味づけの可能性にふれることを提案した。また、その際、新たな意味づけの可能性が他者によっても与えられうるという点を強調した。

このように、自分らしさの変化は、私が自分自身の行為を語り直すことによつてのみ生じるわけではない。他人が私の行為を語り直すことによつても、同様の変化は生じうる。そしてここに、たんに選択肢にかんする情報を提供するというのとは違う仕方で、私が自分らしく生きるのを他者が支援するという余地もまた生じるのである。

■文献

- Brauman, M., "Reflection, Planning, and temporally Extended Agency" *The Philosophical Review*, 109, 2000. (「反省、計画、時間的な幅を持った行為者性」、『自由と行為の哲学』、野矢茂樹、門脇俊介監訳、春秋社)
- Frankfurt H., "Freedom of the Will and the Concept of the Person" *The Journal of Philosophy*, 68, 1971.
- Neimeyer, R. A., Lewin, H., "Coping and Coherence: A Narrative Perspective on Resilience" in C. R. Snyder (ed), *Coping with Stress*:

Efficative People and Processes, Oxford U.P., 2001.

野口裕二『物語としてのケア ナラティブアプローチの世界へ』、医学書院、2002.

野矢茂樹『哲学・航海日誌』、春秋社、1999.

Velleman, J. D., *Practical Reflection*, Oxford U.P., 2000.

Watson, G., "Free Agency," *The Journal of Philosophy*, 72, 1975.

Wirtgenstein, L., *Philosophical Investigations*, Blackwell, 2001. (『哲学探究』ウイトゲンシュタイン全集8、藤本隆志訳、大修館書店)

■註

1 ここでは、当人が選択に先立ってそうしたリスクがあると認識していたとしても、それが当人にとって一定の限度を超えて望ましくないと言えるのであれば、「不本意な結果」と呼ぶことにする。たとえば、抗がん剤の投与によってがん治療を目指す患者にとって、抗がん剤が病状の改善をもたらさないと「可能性は十分に認識されているかもしれないが、実際にそれが現実となれば、やはり不本意な結果であり、がん治療によってもたらされるはずの自分らしさの存続を脅かすものであると言えるだろう。

2 ヴェルマンによれば、こうした欲求の存在により、我々は自分が理由を知らない行為をすることから遠ざけられ、すでに理由を知っていることのみをするようにしむけられると言う。そしてこれが、われわれが自分のしていることの理由を常に答えることができる理由だと主張するのである。しかし、私の考えではこれは強すぎる主張である。というのも、我々は「なぜそんなことをしたのか分からない」と述べる人物にもしばしば出会うからだ。そもそもヴェルマンの挙げている行き先を忘れてしまった人物にしてからが、理由の分からないままにしばらく通りを歩いてしまっているのではないか。それゆえ、自分が何をしているのか分からないとしても、我々があたかも自動機械のように行為し続けることはときとして可能であると言える。重要なのは、(ヴェルマンも指摘するように) 何をして

いるのかわからないことにいつたん気づいてしまうと、我々は行為するのをやめる、ということなのである。このことは、「自分に理解できる行為をしたい」という欲求がすぐれて言語的なものであることを示しているのではない。つまり、「自分に理解できる行為をしたい」という欲求は、人が自分の理解できない行為を遂行するのを妨げるのではない。人が自分のしていることを「自分の理解できない行為」と記述した上で、なおそれを遂行するのを妨げているに過ぎないのである。

3 野矢はこうした事情を踏まえて、行為の意図とは「行為の可能な調整と障害の物語」に他ならない、と指摘している。行為者にとって、何が障害となり、その障害にどのように対処するのかということが行為者の意図のあり方を明らかにしているのである。(野矢 1999: 224-5)

4 野口は、物語には現実を制約する作用があると指摘している。(野口 2002: 26-27)

5 この事例は、Neimeyer and Levitt, 2001: 59-60 より採ったものである。

6 ウイトゲンシュタインが『哲学探究』において示しているうさぎ・あひる図形は(彼自身がそれをとりあげた意図はともかく) 同じ図形の見え方が一瞬のうちに変化しうることを示している。私がここで念頭においているのは、選択や選択がもたらした結果に対する記述の変化が、同様な仕方ですれらの意味合いを変化させるといふ事態である。(Witgenstein 2001: 166^e, 邦訳 385)

(たけうち・せいいち 死生学・応用倫理センター特任研究員)

What is to Live Like Oneself?

Seiichi Takeuchi

Our lives are full of decisions. The more significant these decisions are, the more eagerly we hope to make our choice coherent to our identity in order to live like oneself. It is obvious that we should support these decisions that are true to oneself. In my view, however, it is not sufficient to focus on the support for these decisions alone. For we do not always get what we want as results of these decisions. Sometimes the best choice for us provides the worst result. In such a situation, our identity will be in danger.

In this paper I examine these identity-crisis situations, then consider the way how we restore our identity which are frustrated. My answer to this question is the following. In these identity-crisis situations, we restore our identity by redescribing the situation. Such brand-new description will give us the new perspective through which we are able to view the situation with different meaning. Through this process, our identity may have to change in some respect, but such new identity make possible to live like oneself again.

The most significant point is that such a brand-new description is often given to us from another person. Here is the another possibility for the support someone's identity other than support for one's decision-making. It is to give another interpretation for one's situation and show another life to live on.